

「学校現場を支える教育センターの役割」

～ 「ケース」支援を通じて ～

島根県教育センター 浜田教育センター 教育相談スタッフ 共同研究

【 要 旨 】

学校現場においては、園児・児童生徒（以下、児童生徒等）を取り巻く諸課題についての支援会議やケース会議が開催されることがとても多い。近年は不登校やいじめ問題などの増加もあり、その回数も自ずと増加傾向にあると推察される。

島根県教育センター 浜田教育センター 相談室（以下当センター）では児童生徒等、保護者、学校関係者からの「相談」を通じて様々なケース（事案）に触れることが多い。ケース会議の持ち方や実践方法については様々な先行研究があるが、本研究ではそういったいくつかの先行研究から学校現場で取り入れやすく、かつ有効な方法について研究を深め、それを学校現場のケース会議に活用してもらうことで学校現場を支える教育センターとしての役割に資したいと考えた。

【キーワード：ケース会議 PCAGIP 法 ホワイトボード教育相談 ブリーフミーティング】

1. はじめに

当センターでは平成 29、30 年度の 2 カ年にわたり「子どもたちが抱えている課題の現状を踏まえて浜田教育センター相談室の役割を探る」との研究主題を掲げ研究を進めてきた。その研究の中で当センターに求められている役割の見直し、相談室環境や広報、周知活動はどうあるべきかを検討し、見直していくという活動を通して、より利用されやすい相談室の在り方について考えてきた。

2 年間の研究の結果として、「当センターにおける相談業務について、知られていない部分が多く、相談業務を行っているという点についてもっと周知が必要ではないか」ということが分かり、島根県西部の幼保学校、および保護者への相談案内リーフレットの配布をすること

になった。これにより、当センターの相談機能についての周知と理解が深まり、今年度、来談者の増加につながった。

表 1: 過去 3 年間の来所相談件数との比較

年 度	来所相談件数	備 考
平成 28 年度	1 6 5 件	
平成 29 年度	1 4 9 件	
平成 30 年度	1 7 5 件	
平成 31 年度	1 8 5 件	※2月末現在

今年度からは、相談業務以外の当センターの機能を図る取り組みとして「相談室として、学校現場を支えるために何ができるか」をテーマに据え、新たに研究を始めることにした。

当センターに訪れられる来談者（児童生徒等、保護者、学校関係者）の相談や学校を取り巻く

諸課題から、どんな形であれば学校現場を支える当センターとしての役割が果たせるだろうかと考えたとき、どの学校現場でもニーズがあると思われる「ケース会議の有効な運営」についての研究をし、学校現場でスムーズな導入ができる提案をしていくことを通じ、「学校現場を支える」という当センターに期待される役割を担うことができるのではないかと考えた。

2. 研究に至る背景と目的

(1) 昨年度までの研究から

昨年度までの当センターでの研究の一環として、ケースメソッドと呼ばれる手法を使って、想定されたケースについて、多角的な視点から意見を出し合い、様々な立場から事象を捉え、解決策を検討していくという手法についての研究を行ってきた。

ケースメソッドにおいては、扱う事例が架空のケースであり、ケースそのものの解決を目指すというよりも多様な視点での解決の発想を促すという側面が強いものでもあった。ケースメソッドに取り組むことで、実際の問題事案が起こった場合にも柔軟な捉えや発想で解決策が構築できることを目指していた。

ケースメソッドでは、参加者から出された意見をファシリテーターがホワイトボードに板書し、まとめ、時には広げていくやり方で会議を進めていく。参加者の意見を視覚的にまとめていくという手法は近年、ケース会議でも多く使われていたやり方でもあるが、ケースメソッドの研究を通じて参加者から多くの意見を求め解決策をより広い知見から考えるという会議のやり方についての研究も深めることができた。

学校での実践につなげてもらいたいと考え、

出前講座などの設定も行ったが、学校現場からは「架空のケース」について検討するという点が敬遠されたのか、実際に学校から要請があることはなかった。このことは、学校現場における多忙感や、実際に対応に追われている課題の多さを感じさせるものであると考えた。

(2) 学校現場の諸課題

学校で起こる様々な課題に対して、対応の仕方や事案の情報共有、課題解決対応の方向性の確認などのための「ケース会議」が行われている。「ケース会議」には学校の内外から多様な立場や役割の参加者が集まり、ひとつのケースについて協議し、解決策や次善策について検討される。多様な立場の人たちが集まり、意見を出し合い、互いの立場を踏まえて意見を交わし合うことがケース会議の一つの目的でもあり、利点でもあると考える。

しかし、学校では日々、種々の課題が継続して起こっており、対応すべき事案が多くあるのも現状である。当センターとしても、児童生徒等の相談を通じて学校のケース会議に参加させてもらうことも多くある。限られた時間の中で、ケース会議の効率化や、会議の方向性の焦点化、会議の運営の見直しなどの改善を図ることは、現在の学校が抱えている「多忙感」「時間の制約」という観点からも利点が多いのではないかと考えた。

学校現場で起こる問題事象は年々増加の一途であり「生徒指導主任」や「学年主任」など、複数の関係者によりチームでの支援が組織上組まれていても、最終的には、担任や担当の教職員が一人で解決までの責任を持たなければならないという事態も多くある。このように「ケース会議を開く」までの難しさや多忙な教

職員間の時間調整や会議設定などにも腐心することが多くあると考えられた。

山形大学大学院教育実践研究科の佐藤節子教授は、学校におけるケース会議に積極的に取り組みにくいという課題点について次のようにまとめている。

学校で起こる事象についてケース会議が行われることは多々あるが、学校でケース会議として扱う諸問題ケース会議が必要とわかっていても、忙しい学校現場では、担任や支援員等が日々苦勞し悩みながら個別に対応していることが多い。またチーム支援の必要性は感じていても、専門家や支援員に任せきりになってしまい、意思疎通のある会議のもとで対応を検討して実践するには至っていない現状がある。

筆者は、学校でのケース会議が進まない理由について以下のように考えた。

- (1) 時間がない。特に中・高校では、放課後は部活や会議に追われ時間を取ることが困難である。
- (2) 「様子をみましょう」に終わり、成果を感じられない。会議の結果、何が決まるということもなく問題が先送りになりがちである。
- (3) 原因探し・犯人探しに終わる。「何が悪いのか」「原因はどこか」の話になり、さらに問題が多くなる。
- (4) 他への要求に終わる。「家庭にこうしてもらいたい」「本人がもっと意欲を出さないと」等、他者の変化を期待する話が多くなりがちである。

佐藤はこのような視点から独自に「ホワイトボード教育相談」（詳細については後述）とい

う手法による短時間で解決に導きやすいケース会議の方法を着想した。

上記の佐藤の研究にもあるように、学校現場で行うケース会議について、どのようなニーズがあるかを考えた場合、学校現場でのニーズが高いと想像されるケース会議の姿としては、

- 準備が容易で、会議も短時間でできる。
- 会議のゴール（終着点）の設定が明確である。
- 起こった事象の原因探しに目を向けるのではなく具体的な解決案にフォーカスし、会議が終わった後に何らかの解決の方針が示されるものになっている。

ということではないかと考えた。

3. 研究の方法

そこで、すでに各所で先行研究が進んでいる「短時間で効果を実感しやすいケース会議」の運営について、方法の課題やポイントをまとめ、実際に研究し、学校現場で取り入れやすい方法について、学校現場で使えるよう周知し広げていきたいと、研究の方法を以下のように考えた。

- ① 様々な先行研究がある「短時間でできるケース会議」の手法について研究論文などの文献考察などを通じ、実際の運用方法のコツやポイントなどについて比較検討する。
- ② 当センター内でも「短時間でできるケース会議」を実際に開催し、運営上の課題点などについて調査し、学校現場に導入しやすい方法を検討していく。
- ③ 学校現場でのケース会議で実際に活用することで、利点や運用上の課題点を検討し、運用のポイントについてまとめる。
- ④ 取り組んだ研修の成果について、学校現場での導入につながりやすいようにポイン

トを動画にしてまとめる。(2年目以降)

4. 研究の内容

すでに先行研究としていくつかの「短時間でできるケース会議」のやり方が提案されているので、こうしたすでに提案されている会議の手法について、4つの方法を比較検討し、学校現場で使いやすく導入しやすい方法について探ってみた。

(1) 4つの手法の検討

①【インシデントプロセス法】

マサチューセッツ工科大学のピコーズ教授が提唱した事例研究法の一つで、インシデントとは「小さな出来事」のことを指す。具体的には、実際に起こった出来事(インシデント)をもとに、ケース会議の参加者が事例提供者に質問することで出来事の背景や原因となる情報を収集し、問題解決の方策を考えていくやり方である。支援についての様々なアイデアを共有しながら40分から1時間程度で取り組むことができることが特徴として挙げられる。

インシデントプロセス法を取り入れた事例検討会で期待される効果としては、

○課題解決のための判断力や問題解決力を養

うことができる。

○情報の収集や分析の重要性を理解できる。

○討議の過程を通じて、参加者が互いの意見を傾聴し、話し合い、共に考えることの重要性が理解できる。とされている。

(鳥取県教育委員会 特別支援学校教員 元 気いっぱい 園・学校づくりのポイント集(特別支援教育編 インシデントプロセス法を取り入れた事例検討会より)

また、インシデントプロセス法の利点は、

- ・参加者一人一人が発表者の立場でなく、問題解決の当事者の立場で考えられるので、主体的、積極的な研修ができる。
- ・実際の教育相談活動の場において発生した問題を、参加者が共有体験を通して解決でき、参加者の実践的な活動に結びつきやすい。
- ・事例の資料が短くてすむので、発表者の負担が少なく誰でも引き受けることができる。

(引用先 岩手県立総合教育センター 平成20年度特別支援教育コーディネーターリーダー養成研修講座)

といった利点があると述べられている。

■ インシデントプロセス法を取り入れた事例検討会の進め方(例)

(1) 役割の確認(1分)

- 事例提供者は、あらかじめ決めておきます。
- ※事例について質問に答えられるように準備しておきます。(資料を準備する必要はありません)
- 司会者を立てることも考えられます。

(2) インシデント(出来事)の提示(2分)

- 事例提供者は、インシデント(一番困っている出来事)を発表します。参加者は内容を把握します。

例:授業中に集中できず、すぐにまわりの人の方を向いてしゃべり始めてしまい、困っています。



(3) 事実・情報の収集(10分)

○参加者は、事例提供者に質問し、問題点に関係があると思われる事実や情報を収集し、整理します。

〈質問のポイント・・・事例が起こった背景や原因になることを尋ねる〉

好きな教科、嫌いな教科、学習態度、宿題の提出状況、掃除時間の様子、休憩時間の様子、部活動の様子、友達との関わり、家族構成、家庭環境、生育歴、教育歴 興味・関心のあるもの など

○事例提供者は、質問されたことのみを簡潔に答えます。

〈答えるポイント〉

憶測は言わない。分からないことには「分からない」と答える。

(4) 個々で検討(5分)

○情報を整理し、解決すべき問題点は何かを明確にします。

○支援策(解決策)を考え、付箋に記入します。

※小さな付箋に簡潔に書く。一つの付箋に1つの支援を書く。

〈答えるポイント〉

もし、自分が関わるとしたらどんな指導・支援を行うか考える。いつ、誰が、何をするか、具体的に考える。明日からできそうなことを考える。

〈付箋の例〉

座席を前の方にする。

学習のルールを示す。

学習に活動を取り入れる。

(5) 全体で支援方法を検討(20分)

○大きめの紙を準備し、めざす姿を中央に書きます。

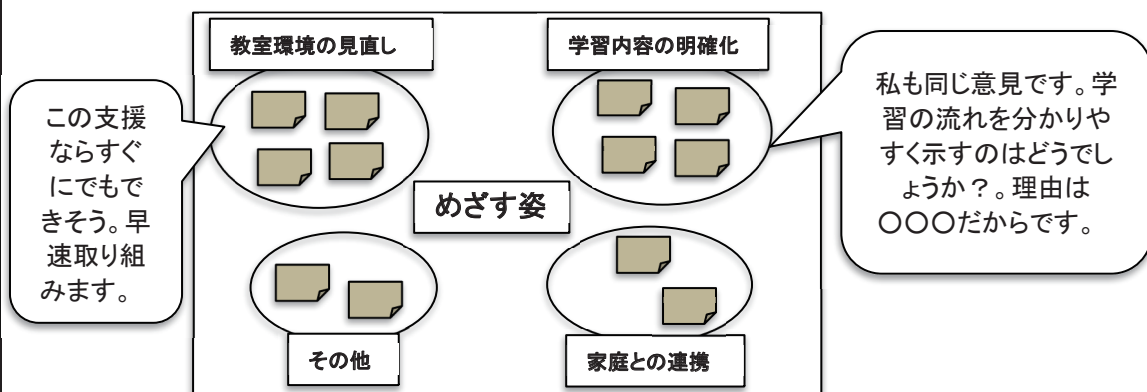
○個人で考えた支援を紹介しながら、自分ならこう対応するという具体的な案と、なぜそうするのかという理由や根拠について話します。

※他の参加者で同じような意見があれば、その場で出します。

○すべての意見を出し終わったら、同じような支援内容をグルーピングします。

○それぞれの支援内容について、良さや必要性・緊急性などを話し合ってみましょう。話し合う中で、よりよい解決策が見いだせる場合があります。

○事例提供者は、できそうな支援を検討し優先順位をつけます。



(6) まとめ(2分)

○事例提供者は、出されたアイデアの中で、すぐに取り組みそうなこと、早急に取り組みたいことなどを決めていきます。

○出されたアイデアについて感想とお礼を伝えます。

(鳥取県教育委員会 元気いっぱい 園・学校づくりのポイント集

特別支援教育編 インシデントプロセス法を取り入れた事例検討会より 抜粋)

インシデントプロセス法は個人での検討から個々の意見を集団に統合していくことや実施できそうな（対応できそうな）解決方法について「絞って検討をしていくことでチームとして解決策に向かっていくことが期待できるとあり、学校現場でのチームでの問題解決に向いている手法だといえる。インシデントプロセス法による課題解決の手法は、教育現場だけでなく産業界など様々な分野ですでに広く活用されている

② 【PCAGIP(ピカジップ)法】

PCA「Person Centered Approach」＋「Group Incident Process」のタイトルが表すように、インシデントプロセス法の手法を用いながら「事例提供者が簡単な事例資料を提供し、ファシリテーターと参加者が安全な雰囲気の中でその相互作用を通じて参加者の力を最大限に引き出し、参加者の知恵と経験から、事例提供者に役立つ新しい取組の方向や具体策のヒントを見出していくプロセスをともにするグループ体験」とこの手法を開発した村山正治氏によって定義されている。

PCA（パーソン・センタード・アプローチ）とはアメリカの心理学者ロジャーズの心理療法・カウンセリングに関する概念で、問題解決の主人公はクライアント（ここでは事例提供者である教職員）であり、事例提供者をあくまでも中心に据え、問題解決のための資源はクライアントの内部にあるという考えに基づいた、成長促進的人間関係を目指したアプローチである。

参加者は「事例提供者を批判しない」というルールのもとに、一人一つずつ事例に関する質問をし、事例提供者がそれに答えながら進めていくというインシデントプロセス法と同じ進め方で検討会を進行していく。

参加者は個人でメモや記録を取らずに前のホワイトボードに書かれる進行内容を全員で眺め、考えながら進めていく。このプロセスを共に体験することで、参加者にグループ意識が生まれる。批判されない安心感の中で、事例提供者は参加者からの質問を受け、それに答えていく過程において、事例提供者の内面に問題解決のヒントが生まれてくるという考え方があ。参加者にもそれぞれの立場での気づき生まれ、その集団の成長が促されることで、その「場」の一体感、参加感、充実感が生まれるというのがPCAGIP法の一番の特長でもある。

事例資料の準備が簡便であると同時に、参加者の相互作用から事例に関するヒントが得られる方法でもあるため、学校現場の実情に即していると考える。PCAGIP法では「事例提供者が元気になる」ことを目指しており、一般的な事例検討とは異なるアプローチである。検討を行う中で、たとえ事例提供者自身の課題が見えることもあっても、そのことが会議の中心ではないとされている。

事例提供者自身を大切に、守られた空間の中でグループメンバーの相互作用から問題解決に役立つヒントを生み出し、事例提供者の心理的成長を目指すという点がPCAGIP法の大きな特長である。

■PCAGIP 法による事例検討会の進め方(例:所要時間 1 時間程度)

段階	時間	活動内容	予想される反応	ポイント
1	5分	〈オープニング〉 ・事例検討会の進め方、方法を確認する。 ・守秘義務について確認する。 〈ルールの確認〉 ・事例提供者を批判しない, 個人で記録を取らないこと等を確認する。 〈記録者の決定〉 ・2名選出する。	・事例提供者も参加者緊張した様子でファシリテーターの説明を聞く。	安心安全な雰囲気をつくる。 ・サークル型に座る。 ・必要に応じてホワイトボードへの記録例を提示する。
2	5分	〈事例発表〉 ・事例資料を配付する(省略可)。 ・事例を発表する。検討したいことも含めて事例提供者が発表する。	・各参加者は事例の概要をイメージする。	事例資料は後で回収する旨を伝えておく。
3	35分	〈情報収集〉 ・参加者は事例提供者と事例をめぐる状況を理解するために, 事例提供者に対し, 一人一つずつ順番に質問する(二巡程度)。 ・応答を記録者がホワイトボードに記録する。	・参加者が事例に関するイメージを深めていく。 ・事例提供者は参加者からの質問に答えていく過程で事例提供者なりの気づきが生まれる。 ・参加者にもそれぞれの立場での気づきが生まれる。	・事例提供者が批判されず安心安全な雰囲気の中で進められるよう配慮する(ルールの徹底)
4	10分	〈情報の整理〉 ・ホワイトボードに書かれた内容を全員で眺めて状況を整理する。補足質問があれば出してもらい。記録者から質問する機会も作る。 〈グループ検討〉 ・2～3人のグループになり, 事例提供者にとってヒントとなることについて考える。その後, 各グループで話し合った内容について発表する。	・共通理解が深まり, その場の一体感が生まれる。 ・全員で一つのことを探求したことで満足感、充実感が生まれる。 ・ファシリテーターが教員をフラットな関係性へと導くことにより, 深い相互作用の中で事例に関する理解及び参加者同士の理解が深まる。	・記録者も参加者の一人であることに留意する。
5	5分	〈事例提供者の感想発表等〉 ・事例提供者の感想を聞く。 ・拍手をして事例提供者に感謝の気持ちを示す。(事例提供者の労を労う)		
〈準備物〉 ホワイトボード、ホワイトボードマーカー(黒板などを用いてもよい)				

(養護教諭が実施する校内事例検討会のあり方—教員の支え合う意識に着目して—

和歌山市立紀伊小学校 養護教諭 箱木委公子)

③【ホワイトボード教育相談】

前出の山形大学大学院教育実践研究科の佐藤節子が提案する「短時間で解決志向のできるケース会議の方法」である。ホワイトボード教育相談の着想について、佐藤は研究要旨に次のように記している。

子どもたちや学級集団の問題について校内教育相談会や特別支援校内会議等のケース会議を聞き対応策を話し合う。短時間で対応が明確になるケース会議が求められている。

そこで効果的なケース会議の在り方について考察し提案する。それは、“ファシリテーション”と“解決志向アプローチ”の理論と手法を生かし、情報を可視化し、実際に実施可能な対応策を考える方法であり「ホワイトボード教育相談」と名付けた。

その名が示す通り、ホワイトボード上に現在話し合っている事柄を可視化し、情報を参加者と共有しながら進めることがひとつの特長である。しかし、そのこと自体が重要なのではなく、佐藤は、ケース会議を進める上での重要な姿勢について以下の6点にまとめており、これは「ホワイトボード教育相談」で行うケース会議を運用するに当たっての大切な指針となるものであると考えられる。

- ア チームで援助する。
 - イ 解決志向・未来志向であること
(問題探し・犯人探しに終始しない)
 - ウ アセスメントに基づいた対応を知る。
 - エ 学級・家族等のシステムに目を向ける。
 - オ 勇気づけから出発する。
 - カ 会議をファシリテートする。
- これらの要点は、解決志向で取り組むケース

会議の根本的な考え方を提案しているものであり、この後紹介するブリーフミーティングと共に会議運営の基本的な骨格を示しているものであると言える。

「ホワイトボード教育相談」を実施することによって得られる効果や利点を佐藤は次のように考察している。

【時間的負担が少ない】

はじめに会議の目的と終了時刻を明確にすることによって、終了時刻を意識して進行する。参加者は設定された時間の中でよりよい方法を出そうと知恵を絞り合う。

【目的がぶれない】

目的を明確に示しているために、役に立つ情報や方法に話題が集中する。延々続く「誰が悪い」「何が問題」という話題から脱し、「誰が、何をいつからいつまでやるか」という具体案が納得感を伴って確認される。昨年から取り組んでいる学校からは、この会議の方法を用いて不登校支援を具体化させることができ生徒の再登校に結びついたという報告が数件寄せられている。

【記録がその場で完成する】

ホワイトボードに話し合いを描き込んでいくことによって、チームで対応策を考えているという実感がある。また、デジカメで撮影し印刷することによって、そのまま記録になる。次回はその記録の確認からスタートすることができる。つまり個人メモリーから共有メモリーになり、記憶ではなく共有の記録を大切にすることが出来る。

【対応のアイデアが出やすい】

ブレインストーミングでアイデアを考えるために、互いの経験や知識が触発されて多様な対

応策が出やすい。

【参加している実感がある】

ボードに意見が描き込まれることによって、個人の意見が平等に扱われ、参加意欲が高まる。特に担任や保護者は、責められる感が少なくなる。これまでの会議では、どうしても担任や保護者の心理的負担が大きかったが、全員がホワイトボードをみることによって、共によい方法を考えようとする意識が生じる。

【途中参加してもわかりやすい】

学校での小会議は開始が遅れがちである。しかし、遅れて参加した場合も、ホワイトボード

の記録を見るのでわかりやすい。よって遅れるメンバーを待たずに開始の時間を守ることができる。

このようにホワイトボード教育相談の進め方や会議が開かれる場面の想定が、学校現場の置かれている状況やニーズにより特化しているものであるとも言える。

事例提供者とともに参加者も会議への参加の意欲を高め、途中からでも参加することへのモチベーションもケアされているという点で優れた会議方法であると思う。

■ホワイトボード教育相談の進め方(例)

1 はじめに伝えること

- (1) 終了時刻を確認しホワイトボード右上に記入する。
- (2) 会議の目的・目標を明らかにする。あるいはすり合わせる。
会議の目的の確認。
何を話し合うか、どこまで話し合うかをすり合わせる。
- (3) 会議のルールを確認する。
犯人探しをしない。
原因探しに終わらない。
現実に私たちができることを決める。

2 事例報告（担任等）

（黒マーカーでホワイトボードに書き込んでいく）

- (1) 本人の現在の様子 特徴的なところ・うまくいっていること
- (2) これまで取り組んできたこととその成果
家族関係や交友関係は図で描くとわかりやすい。
2回目以降は、効果のあったことを中心に報告

3 短期目標と長期目標の設定（指導計画を作成する場合・取りあえずの目標でよい）

- (1) 月、学期単位の援助目標
- (2) 長期（学年末、卒業時）の目標

ここまでおよそ 10 分

4 事例に対する参加者の質問

- (1) 解決の手がかりになりそうなことを質問する。
- (2) 広い視野からのリソース探し

5 事例に対する見立て

- (1) 発達障がい等の可能性
- (2) 解決に役に立つ見立て

ここまでおよそ 20 分

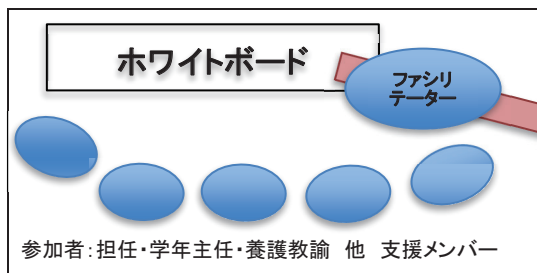
6 今後の取組を考える (青マーカーに変えてアイデアを記入していく)

- (1) 具体的手立てを提案 (ブレインストーミング)
- (2) 実際にやれることについて話し合う。
何をするか。
誰がやるか。
いつからいつまでやるか。
- (3) デジカメ等で記録する。
個別の指導計画に保存
- (4) 参加者へのねぎらいと次回開催日を伝えて終了する。

(決まったことは赤マーカーで囲む)

ここまでおよそ 30 分

次回は記録をみることから始める。前回以降の変化を中心に事例報告をする。



会場レイアウトの例

事例の名前	目的目標	終了時刻
事例の特長	これからやってみること (個別の支援計画など) 次回の予定	
やってみたこと		
事例の見立て		

ホワイトボードの記入例

(学校における効果的なケース会議の在り方について - 「ホワイトボード教育相談」の試み - 佐藤節子 山形大学大学院教育実践研究科)

④ 【ブリーフミーティング】

前述のホワイトボード教育相談をヒントに、高知市の TILA 研究所で開発された、やはり「短時間で、解決志向で」行うということを目指した手法である。ホワイトボード教育相談とも、基本となる考え方に共通する点が多い。

ブリーフミーティングは、ミルトン・H・エリクソン博士のブリーフセラピー全般と Solution Focused Approach の考え方にヒントを得ている。他の手法では会議の進行役が全体をファシリテーションすることから「ファシリテーター」と名付けているが、ブリーフミーティングではファシリテーターの役割をする人を「Catalyst カタリスト」と呼んでいることが特長である。カタリストは事例提供者やメンバーの思考や枠組みに変化を起こす触媒であるとの意味づけらしい (注: Catalyst とは、触

媒、促進の働きをするものの意味)。

また事例として上げられている事柄についてのリソース (プラスになる事項や資源) について語られることが多く、「会議の設定を 30 分で」というより短時間でゴールへたどり着くことを目指しているというところが一番の特徴である。

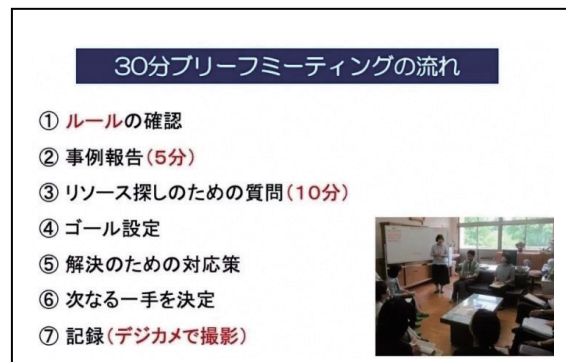


図1 ブリーフミーティングの流れ

(2) 各手法の特徴の比較

ここまで紹介した4つの短時間でできるケース会議の手法について、表にまとめ比較をしてみた。

表2 4つのケース会議の手法の比較

	インシデント プロセス法	PCAGIP 法 (ピカジップ)	ホワイトボード 教育相談	ブリーフ ミーティング
会議時間	1 時間程度	40 分～1 時間	30 分～1 時間	30 分
事前の資料 準備	事例提供シート に記入。主訴を一 点に絞り具体的 に記入する。	事前の準備なし	事前の準備なし	事前の準備なし
事案の報告	参加者が事例報 告者に対して一 つ一つ質問をし ていく形で進め る。	事例提案者と1対1 で質問に対して答 えていくというや り方で行うが、事例 提供者を批判しな いというルールが 原則としてある。	これまでの取組の 中でうまくいって いること等を中心 に解決志向で、リソ ース探しを中心に 進める。	事例提供者が5分程 度で、今一番困っ ていることについて報 告をする。時間が延 びてもいったん中断 し、その後の協議中 で提供してもらう。
記録の仕方 など、 各会議の特 徴について	最初は個人内で 検討したことを 次に小グループ で検討するとい う段階を経る。最 終的には支援策 を A3 程度の紙面 にまとめる。参加 者の提案として 「すぐにできそ うな支援」につ いて挙げるよう にする。	参加者は基本的に メモをとらずに事 例提供者の話に傾 聴する。あくまで も、事例提供者を中 心とし、問題解決の リソースはクライ アントの中にある と考える。参加者も 課題解決のプロセ スを共に体験する 中でグループ意識 が育まれるという ことも特長である。	問題解決に当たっ ての「犯人探し」や 「原因探し」をする のではなく、解決志向 で答えが出ていく ように進めていく。 ホワイトボードを デジカメで撮って 記録とする。	事例提供がなされた 後、参加者は問題解 決のための資源（リ ソース）について話 を出すようにする。 カタリストの進行で 30 分で解決に導け るように進める。カ タリストが主導で会 議を進めるのでな く、参加者を促すよ うにして会議を進め ていく。
進行役名	司会者	ファシリテーター	ファシリテーター	カタリスト

(3) センターでの実践例

上記で紹介したケース会議の実施方法の中から、当センター内研修として、実際に、ブリーフミーティングと PCAGIP 法の二つの手法を使ったケース会議を実施した。

なお、実際のケース会議の内容については個人情報保護の観点から、それぞれの協議内容についての詳細は割愛し、会議の運営や手法につ

いての課題点などについて記することにする。

① 【ブリーフミーティングの手法を使った事例検討会】

- 日時：令和元年 10 月 23 日
- 当センター相談室内研修として
- カタリスト：当センター指導主事
- 事例提供者：相談室スタッフ
- 相談事例：来所者 A さんについて

○事例提供者の次の一手、解決策を模索するという視点と共に、「30分のできるブリーフミーティング」の流れに沿ってケース会議を運営しケース検討会を行った。何よりも、「30分のできる」というタイトルに惹かれ、短時間での解決を目指したいと考え実施をした。

・当センターで、ブリーフミーティングの手法に則って検討会を行うのは初めてであったため、ケース検討会を始める前に「ブリーフミーティング」の特長や、会議の概要が分かる資料を参加者に配布し、このようなやり方でケース会議を運営したいということを告知して開始した。

・実際に会議がスタートすると、カタリストが参加者からの意見の集約が充分にできず、参加者から「いつ、自分の意見を言うのか？その後の展開がどうなっているのか？」が分からないという意見が出され、「今この場で何について語るべきか」という不安を参加者が持ちながらの協議になる展開になってしまった。

・タイムスケジュール通りに進めようとするあまり、参加者からの質問やリソースに関する情報提供、事例提供者が得たい解決策(次善策)などがごちゃごちゃになって、まとまりがなく整理がつかないままの終結になった。

・カタリストの会議のゴールセッティング、事例発表後のゴールの再セッティングがうまく機能せず、しっかりと論点を集約することができなかった。

実際にブリーフミーティングを行ってみると、カタリストの能力に左右される部分が非常に大きいことを改めて実感した。もちろん、参加者も初めて取り組むやり方であり、提供された事例にある登場人物のリソースや状況を「解

決志向的に」捉えにくいということはあったかもしれないが、やはりカタリストの力量、協議の回し方、時間の切り上げ方など、会議運営の手法について経験を積まないと難しい、つまり、ファシリテート力をつけることが課題であると痛感したケース検討会となった。

② 【PCAGIP法を使つての事例検討会】

■日時：令和元年12月11日

■当センター内研修として

■ファシリテーター：当センター相談員

■事例提供者：当センター指導主事

■相談事例：来所者Bさんについて

○最初にこの日のファシリテーターからPCAGIP法の会議手法についての概要や要点を話し、どのような展開で会議が進むのかの流れを参加者に伝えてから実施した。

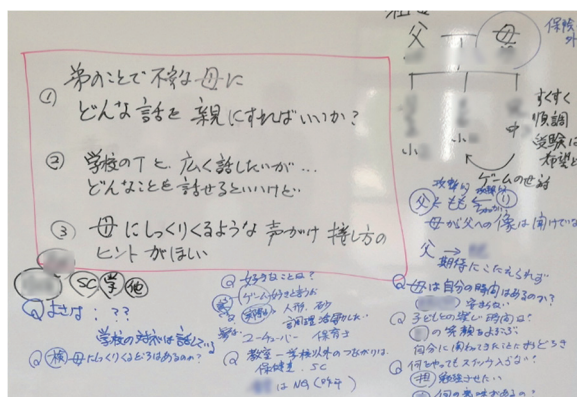


図2 PCAGIP法による検討会板書

・この回のファシリテーターは多数PCAGIP法を使って会議を実施している所員が担当し、この会議におけるゴールをどのように事例提供者自身が考えているかを最初に尋ねられ、事例提供者は次のような3点を挙げた。

ア 兄弟のことで不安な母にどんな話をすればよいか？

イ (来所者が通う) 学校の先生方と広く話したいがどんなことを話せるとよいだろうか？

ウ 母に対し、じっくりくるような声がけや接し方のヒントがほしい。

このゴールに向かって参加者から質問が出され、事例提供者が応えていく形でケース会議が進んだ。参加者から出された質問は

Q: 母は自分の時間を持っているのか?

Q: 子どもと接していて楽しいと感じる時間はあるだろうか?

Q: 学校以外の地域とのつながりやリソースとなる場所はあるだろうか?

Q: 将来の姿をどのように母は描いているだろうか?

Q: 本人たちのヤル気がおきるスイッチはどんなことにあるだろうか?

このような質問が参加者から出され、事例提供者からの回答を元に参加者も一緒になって「解決策」の答えを探していく展開となった。時間は45分ほどであったが、最終的に事例提供者からは「(対象の児童と保護者に) どのようにアプローチしていけばよいのかが分かって整理されてスッキリした。方向性が分かった気がする。」という感想が聞かれ、事例提供者自身が何らかの勇気づけをもらうことを目的の一つにしているPCAGIP法の良さを感じたケース会議だった。

会議を通じてファシリテーターの「もっといいところや褒められるところはどこですか?」と言った声かけや、「課題はそこにあるのだろうか?」といった問いかけで参加者も事例提供者も共に考え方を切り替えてリセットされ、新たな発想による質問が出るような場面があった。ファシリテーターによる会議運営の大きな差を感じることもあった。

③ 【学校現場に出向いての事例検討会】

■日時: 令和2年2月3日

■浜田市内中学校の職員研修として

■ファシリテーター: 当センター指導主事2名

■事例提供者: 中学校の教職員(教員だけでなく、栄養教諭や事務職員も参加)

■相談事例: 当該校在籍の2名の生徒Cさん・Dさんについて

市内の中学校から特別支援教育に関する研修会と併せて、在籍している2名の生徒についての事例検討会を持ちたいとの要請があり、指導主事2名が出かけていき、事例検討会を行った。先に挙げた4つの手法の中の、どの手法を用いてということではなかったが、事例検討会にかけられる時間が30分程度と短く、奇しくも「短時間で解決を目指す事例検討会」をファシリテートすることになった。

当該校の特別支援教育コーディネーターと、検討する生徒の実態について伺ったり、どのように教職員に会議に参加してもらうかを話し合ったりする中で、「会議のゴールを示して事例検討会をしよう」ということになった。そのゴールは「(事例で話す) 生徒が今よりもちょっとよりよい生活、今よりもちょっと豊かな学校生活を送るには、自分(教職員)ならどうするかという視点で考える」ということを会議のゴールとすることになった。

会議の流れ

ア 教職員個々と当該生徒との普段のかかわりや、教育支援計画から、生徒の姿を思い浮かべ、「本人の不安や心配」「本人の困り感」を考える。また、行動の背景(なぜ?)を考える。

イ 生徒の良さや得意、または、できていることを考える。

ウ 生徒にとってのリソースを考える。

※リソースとは、資源やその人の資質のこと、問題を解決したり、よい状態を生み出したりするのに役立つ資源、エネルギー源のこと。

エ 「明日から自分ならこうしたい」を考える。という設定とした。

参加者である教職員にこの流れを提示し、生徒2名についてそれぞれ6名ずつの二つのグループに分かれ、各グループにファシリテーターとして指導主事が1名ずつ付いて事例検討会を運営した。

事前資料として、この検討会のために新しいものは用意せず、すでに作成されていた各生徒の「教育支援計画」を配付し、研修前に読んでもらい、生徒の実態や学習上の課題や目標について共通理解を図った上で行った。

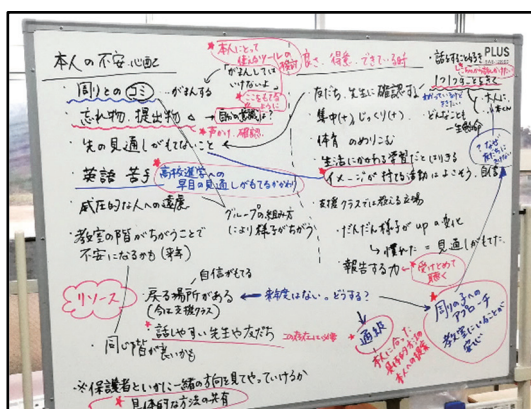


図3 学校に向いてのケース会板書

最初は生徒の困っている点や授業中に気になる点などについての意見を出し合うところからはじめたが、生徒の良さ、リソースについて問かけると、先生方の中から「そう言えば・・・」「こういうところは（生徒の）いい点だよ」といった視点での意見が出されるようになってきて、グループとしても生徒の実態を肯定的に捉える意見が出されるようになって

てきた。また、リソース探しの中では、「生徒が自信をもっているであろう活動」や「地域の中で頑張っていること」などについての意見も出されてきた。最終的に、参加した教職員それぞれに「今の状態をちょっとよくする働きかけ」について語ってもらい、「生徒自身をどう変えるか？」という視点でなく、教職員の関わり方や見方をどのように変えるかという点での話が多く出された。会議の最後にはゴールセッティングとして示していた「生徒が今よりもちょっとよりよい生活、今よりもちょっと豊かな学校生活を送るには、自分（教職員）ならどうするか」という視点での意見を教職員から出してもらい終了した。

ホワイトボードの板書もまともならず、ファシリテーターとしての会議の運営としても満足できるものではなかったと思うが、参加者のみなさんが検討会の中で生徒のことを肯定的に捉えたり、解決志向的な発想で意見を出されたりすることが多くあったとも感じた。最終的に「生徒自身の課題」を確認し合って終わるのではなく、「生徒を支えるためにどう（自分が）関わるべきか、支えるべきか」という自分にできる解決策について考えられたことが大きかったのではないかと感じた。事例検討会が終わって、当該校の特別支援教育コーディネーターからは「こんなに意見が出るとは思わなかった。」「普段自分たちだけでは、こういう発想や展開で事例検討ができることはなかった。」とも言ってもらえた。今回は、「時間の制約があること」「会議のゴールセッティングを示すこと」「自分がどう関わるかを具体的な解決志向的に考えるということ」を予めしっかりと押さえて検討会に臨んだことがよかったと思われ

る。さらにファシリテート力をつけて、ケース会議の運営ができればもっとも効果上がるだろうという期待感を持ちながらの事例検討会となった。

（４）実際の「ブリーフミーティング」の視察

センター内での研修や学校現場に出向いてのケース検討会の運営など、いくつかの手法を使って、ケース会議を運営してきたが、「ブリーフミーティング」の運営のコツやホワイトボードへの板書、特に会議をファシリテートするその実際を見てみたいと考えた。

実際に運用されている事例検討会を見ることでファシリテーターとしての力量を高められたり、学校現場に周知していく中でのアドバイスやヒントにつながる部分が得られたりするのではないかと考えた。

そこで、「ブリーフミーティング」を提唱されている高知県の TILA 研究所のメンバーである高知市立城西中学校の吉本恭子校長先生にお願いし、実際に学校現場で行われているブリーフミーティングの様子を見学させて頂く機会を得ることができた。

実際のブリーフミーティングの運用を見せて頂き、カタリストの会議運営のポイントを学ぶと共に、自分たちでやってみてうまくいかなかった課題点やコツなどについても吉本校長先生に尋ねたいと考えた。

【学校視察訪問】

日 時	令和2年2月19日
訪問先	高知市立城西中学校
会議名	不登校支援委員会

① 高知市立城西中学校の不登校支援委員会について

高知市立城西中学校では、週1回、生徒指導と不登校生徒に関する校内支援委員会会議を設定している。その会議の中で生徒に対する支援の方向性を検討するツールとしてブリーフミーティングを開発された吉本恭子校長先生の下、「ブリーフミーティングによる事例検討会」を行っておられるそうである。

この会議には、管理職、主幹教諭、養護教諭の他、各学年に配置されている不登校担当教員、SSW、SC以外にも高知市教育委員会の人権子ども課の生徒指導班のスーパーバイザーの2名、高知市教育研究所（注：市の教育センターにあたる組織）からの担当者なども可能な限り参加されているということであった。

この会議自体の設定が毎週水曜日の5校時に設定されており、会議全体の時間も50分で終了する必要があるという時間設定もとてもタイトな設定になっている。視察させていただいた日の会議もレジュメにも、「長期欠席生徒の個表の作成について」「ブリーフミーティングによる検討会」「各学年からの不登校生徒に関する情報交換」と議題も多く記されている中で、支援会議とその中で行われるブリーフミーティングを視察させて頂いた。

② ブリーフミーティングの実際の視察から

ここでも、実際を中心となる事案については個人情報保護の観点から割愛し、吉本校長先生の運営と事例提供者、参加者の発言などを中心に、ブリーフミーティングの流れ全体を追いつつ、会議の運営や参加者の発言など、参考になった点など中心に挙げていきたいと思う。

【ブリーフミーティングの環境設定】

・中学校を訪ね、校長室に通されると、校長室には移動式ホワイトボードが常設されて

いて、そこにすでにブリーフミーティングでの板書に必要なタイトル項目を記したマグネットが貼られていた。会議がすぐにできる状態にある様子が窺えた。

・予定の5時間目が近づくと、参加者が次々と校長室に来室。事例提供者の担任が校外活動のため遅れてくるとのことで、会の招集を担当しているのは養護教諭から議題の入れ替えの案内があり、不登校に関する調査物などの連絡が行われ、時間を無駄にしないという雰囲気があった。

・事例提供者である学級担任が遅れて到着、カタリストである吉本校長先生の声かけで、それまでの会議の進行とシームレスな感じでブリーフミーティングが始まった。ケース検討会が特別なものでなく、校内で日常的に行われているという雰囲気がある。

【カタリストによるルール、時間の確認】

・吉本校長先生がホワイトボードの前に立ち「今、13時52分なので終了は14時22分です。」と「終了時刻」と書かれてあったマグネットボードの横に時間を記入。

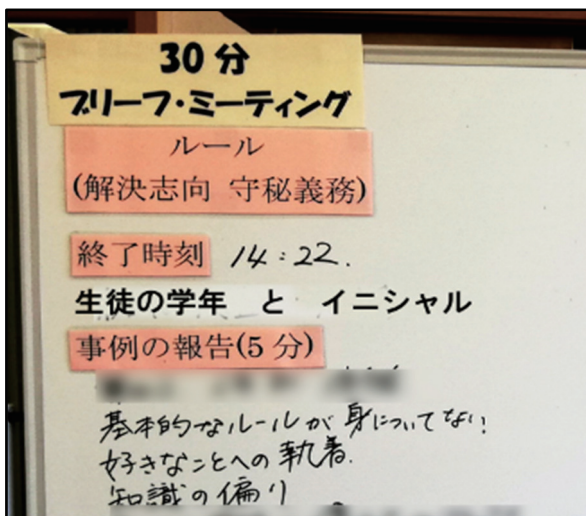


図4 ブリーフミーティング導入板書

【事例の報告】

・「事例提供者のE先生から、生徒Fについて5分程度での事例の報告をお願いします。」の声かけで「事例報告(5分)」のマグネットボードの下に事例提供者からの事例情報を書き加えていく。

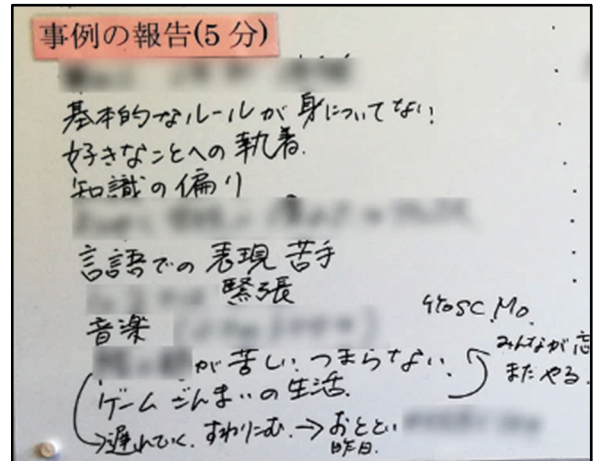


図5 事例の報告の板書

【質問・リソース探し】

・事例の報告に続いて「では、リソース探しと質問に移ります。誰からでもどうぞ」の声かけで参加者から、事例提供者への質問と、参加者の考える本人のリソースについて意見交換が行われる。参加者から出されたリソースはカタリストが板書していく。

・途中でカタリストである吉本校長先生から「こういう見方以外にどんな見方がありますか?」「その他に、(対象の生徒の行動を)取り巻く要因はどんなことがあるでしょう?」などの問いかけが適宜入る。

・カタリストの促し「(参加者の)〇〇先生、が学習上で関わりがあると思いますが、どんな良さがありますか?」等の声かけで、参加者の意見や視点が更に深まっていく様子が見てとれた。解決志向に導くための視点を参加者に与え、参加者の発想を豊かにしている

感じであった。

・ブリーフミーティングにおいて、ファシリテーターでなく、カタリスト（触媒、変化を起こす人）と名付けている通り、会議を進行するだけでなく、参加者の視点を広げたり、事象の捉え方についても違う観点での促しをしているところ等まさに「触媒」の役割だと感じた。

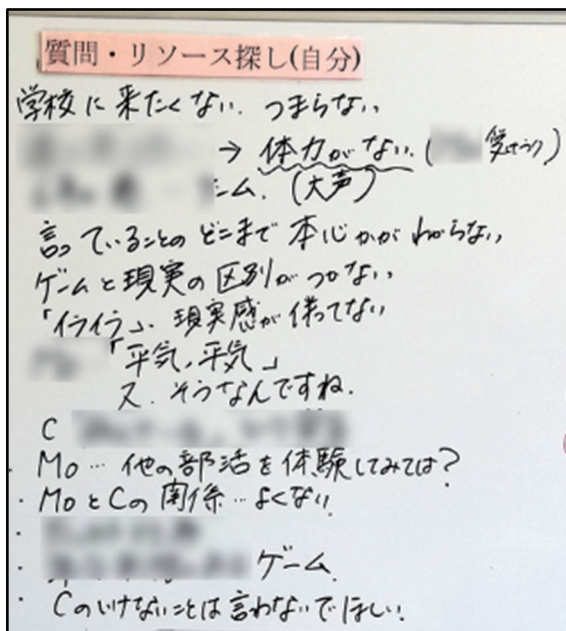


図6 質問・リソース探しの板書

【今日のゴール設定】

・参加者からの質問とリソース探しが終わると、「では、(事例提供者の) E先生、今日のゴールはどういうことにしましょうか？」と質問をされた。事例提供をしたE先生は「所属している部活動で生徒Fが他の友達(具体的に誰と誰までという個人名を挙げて)と話せるようになる」ことを今日のゴールとして挙げられた。

・この中学校ではブリーフミーティングでの検討会に慣れておられるからだろう、事例提供されたE先生も、具体的に行動としてどのような変容があるかを示す形でゴールを設

定された。

・ケース会議事後の吉本校長先生のお話によれば、もっと、回数や期間なども具体的に数値として示せるようなゴールセッティングができればよかったと話されていた。

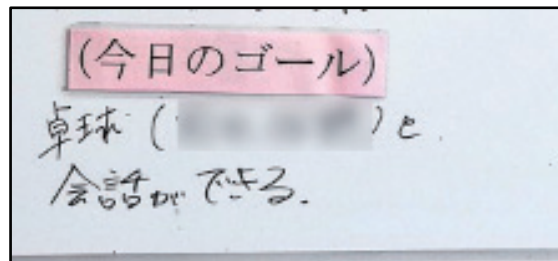


図7 今日のゴール設定の板書

・また、ゴールの設定は「〇〇しなくなる」「〇〇をやめる」などの否定形ではなく、「〇〇するようになる」「〇〇できる」という肯定の形でゴールを設定することが大切だと話された。この点は、ケース会議でもよくあるゴールの設定のコツであり、ゴールを肯定形で示すことで、次に行われる参加者からのブレインストーミングにも肯定形での提案が引き出されると考えられる。

・今回の会議では行われなかったが、会議の話題の進行によっては、カタリストにより、「ゴールの再設定」が行われることもあり、ゴールが「実現可能な設定」であることも重要であることが窺われる。

【解決のためのブレインストーミング】

・「では、みなさんからゴールに向かう変化(を起こす)ための意見を出してください。」とのカタリストの声かけがあり、参加者から多様な意見が出された。

・ゴールセッティングの時のように、参加者から出されるどの意見も肯定形であり、「〇〇をする」という動詞の形で出されているのがとても印象的だった。

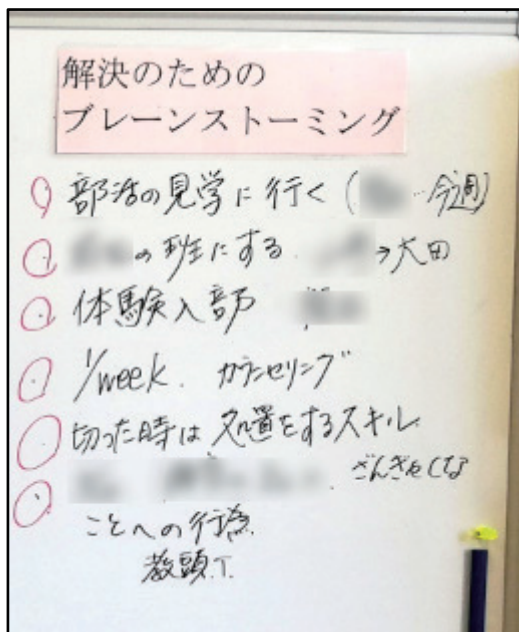


図8 解決のためのブレインストーミング

【事例提供者による決定】

・ブレインストーミングが終わった後、「さあ、E先生（事例提供者）出された中からどれをやっていきましょう？」との促しがあった。ブリーフミーティングに慣れておられる参加者のみなさんが出された意見ということもあるであろう、どれもが実現可能で具体的

に取り組みそうなアイデアが出されていた。事例提供者のE先生は全ての提案について「取り組んでみる」と選ばれ、誰に対して、誰がアクションを起こしていくのかということも、この後に参加者の意見を取り入れながらカタリストがホワイトボードに書き入れていた。

カタリストの吉本校長先生の進行により、予定されていた14時22分（会議時間30分）ちょうどにブリーフミーティングは終了した。その後、議題は不登校生徒の情報交換に移って、5時間目相当に当たる50分間の間で不登校支援会議は終了した。

ブリーフミーティングを実施している途中でも、校長室を訪れた他の教職員に呼び出され、ミーティングの参加者が抜け、廊下で他の案件の対応に当たるということもあったが、参加者が戻ってこられると、それまでの進行をホワイトボードで確認し、再び会議に参加されていたのが印象的だった。

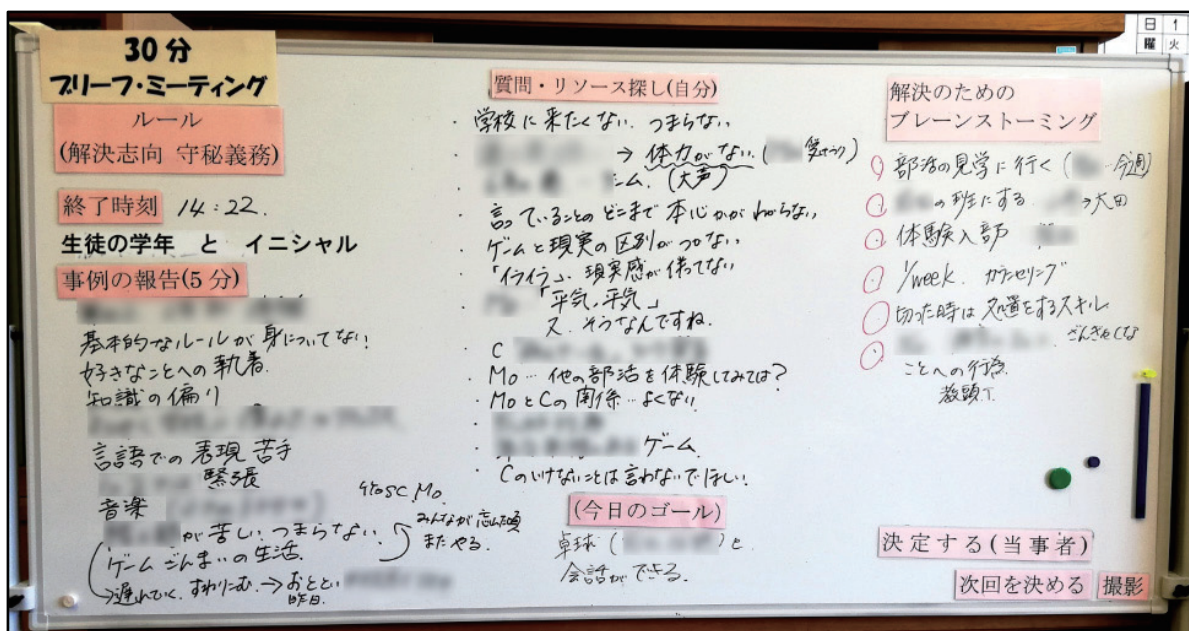


図9 ブリーフミーティングの板書全図

③ 吉本校長先生との懇談

会議後に吉本校長先生にブリーフミーティングについてのお話を伺うことができた。

Q:「私たちも教育センター内でブリーフミーティングを実施してみて、その可能性にとっても魅力を感じましたが、どのような発想で、ブリーフミーティングを開発されたのでしょうか？」

A:「学校現場では、どこでもそうだけれどもとにかく時間に追われることが多く、今日もそうだったけれど、会議が予定されていても校外活動や部活動などで参加者が揃わないことが多々ある。会議途中で抜けて対応しないといけない事例もある。そんな中で、ある研修会に出かけ『ホワイトボード教育相談』を見せてもらって、ホワイトボードでポイントを整理しながら、途中からでも参加でき、中抜けする参加者がいても会議に戻って来られるということも参考にした。」

Q:「『短時間でできる』『解決志向である』というところがとても魅力的だと感じますが、やはりカタリストのファシリテート力によって会議の終わりが大きく左右されると思うのですが、ブリーフミーティングを進行するにあたってのコツを教えてください。」

A:「ひとつはやはり回数をこなすこと！30分のできるから、2セット行ってもよいし、TILA研究所などでもブリーフミーティングのカタリストの力を上げるための研修を行っています。それと、慣れないうちは、カタリストは進行のセリフを『30分でスッキリ！ブリーフミーティング』（鹿島真弓、石黒康夫著 図書文化）の中にあるシナリオ通りに進めていくことでも大丈夫だと思います。慣れないうちは、そのままやって頂いて、回数をこなしていくこと

が大切です。また、カタリストが解決志向になっていることも必要です。カタリストはやはり、どこに変化を起こすか？を考えながら進めていくことも重要です。」

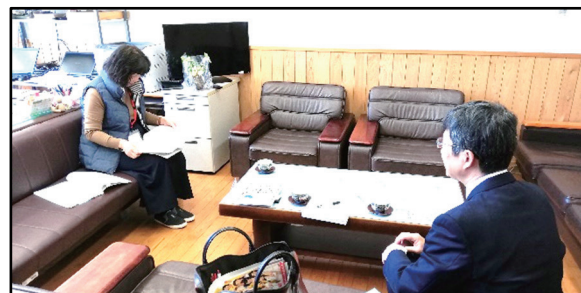


図10 吉本校長先生との懇談

Q:「今日のブリーフミーティングもそうでしたが、参加者の人たちの考え方も、解決志向に切り替わっていないとなかなかいいブレーンストーミングや解決策にたどり着けないと思うのですが、そこはいかがでしょうか？」

A:「今までにあった一般の事例検討会では、やはり、「〇〇をしなくなる」という形での解決を目指す話し合いが多かった気がします。

「しなくなる」という発想では、前向きなアイデアは出てこないのでも「〇〇する」という肯定形で考えていくことが大切だと思います。また、事例提供者の意見を否定しないということも大切です。また、事案の『見立て』に時間を使わない、参加者の考え方の枠組みで事象を捉えないということも必要です。」

Q:「ブリーフミーティングを開催するのに、適した人数というのはありますか？」

A:「研究所のブリーフミーティングの研修では20人くらいまで参加して行ったことがあります。会議としては10人くらいが適当ではないでしょうか。」

吉本校長先生は、一昨年度から松江市教育委員会の招へいにより、松江市でも「いじめ問題への対応」「教育相談体制の整備・充実」「児童生徒理解の推進」などのテーマで講演をされておられ、ブリーフミーティングだけでなく、幅広い知見から学校の児童生徒等、あるいは保護者を支える活動を広く行ってきておられることが分かった。

令和2年度も、松江に来られるということで、ぜひ、またエネルギッシュな吉本校長先生の取り組みについてのお話を聞かせていただきたいと思えた2時間の滞在であった。

5. まとめと今後に向けて

今年度「学校現場を支えるセンターの役割」として「ケース」支援の一つの手段として、短時間で開催できるケース会議について、四つの手法の比較検討を行った。その中でもブリーフミーティングについては、開発者の一人でもある吉本校長先生の実際のカタリストとしてのミーティング運営を見せて頂き、カタリストとしての技術のポイントについてもお話を聞かせて頂く好機にも恵まれた。

先にも述べたように、学校現場では日々、生徒指導やいじめ問題、保護者対応などで教職員も、児童生徒等も保護者もその解決に向かって頑張っている。しかし、その数がゼロになることはないし、そういった事例への対応をし続けることも学校の大きな役割の一つであるともいえる。

学校現場で日々奮闘している教職員の助けになる当センターでありたいと思いながらこの研究を進めてきた。「短時間で」というところは大きな魅力であるのは間違いないが、決してそれは一つの目標にしかすぎず、

やはり、解決に向かって行こうという「解決志向」に強く惹かれるところがあったと考える。相談をすることや、ケース会議を持つことで、今の困っている事象が少しでも前に進む、良い変化を起こすということを私たちは常に持ち続けたいといけなく強く思った。

来年度に向けて、当センター内での事例検討会や学校現場でのケース会議などに積極的に出向き、取り組んでいきたい。それが「学校現場を支える」ための良い変化を起こす一助になることを願っている。

【引用・参考文献】

『元氣いっぱい園・学校づくりのポイント集 特別支援教育編』

鳥取県教育委員会東部教育局 HP より

『1時間でできるケース会議研修会』

埼玉県立総合教育センターHP より

『平成20年度 特別支援教育コーディネーターリーダー養成研修講座』

岩手県立総合教育センター 資料より

『PCAGIP法とは何か?』

産業カウンセリング研究所 PCAGIP 入門講座より

『養護教諭が実施する校内事例検討会のあり方—教員の支え合う意識に着目して—』

和歌山市立紀伊小学校 箱木委公子

『学校における効果的なケース会議の在り方について—「ホワイトボード教育相談」の試み—』

佐藤節子(山形大学大学院教育実践研究科)

『30分でスッキリ、ブリーフミーティング』

鹿島真弓 石黒康夫 著

『～ブリーフミーティングとは～』

T I L A教育研究所 HP より